

今回は「仕事で一番大切にしたい 31 の言葉」という本からです
**乗る人がいなくて赤字になるなら、乗る客をつくりだせばよい。それには沿線に人の集まる場所をつくれば
いいのだ。**(阪急電鉄創業者 小林一三)

「100 歩先の見える者は狂人扱いされ、50 歩先の見える者は多く犠牲者となる。1 歩先の見える者が成功者で、現在を見得ぬ者は落伍者である。」これは小林一三が事業の師・岩下清周からしばしば聞かされた言葉である。一三は岩下の時代の犠牲者だったと認識していた。そして、一三自信は時代の成功者となった。人生には転機というものがある。この転機にいかに対応し、いかに決断したかが、その人の運命を決める。一三の場合、1915 年(大正 4 年)に北浜銀行事件が起こり、北浜銀行頭取の岩下が逮捕され、失脚したことが一大転機となった。岩下は、一三が専務だった箕面有馬電気鉄道(現・阪急電鉄)の社長も辞めた。北浜銀行事件とは、大阪日日新聞が大阪電軌道(現の近畿日本鉄道の前身)、大林組などへの北浜銀行の融資が不良債権化していると攻撃をしかけたのがきっかけとなり、預金者の取り付け騒ぎが起こり、同行が休業・整理に追い込まれた事件である。今日では政治的陰謀といわれている。北浜銀は、箕面電鉄の社長を兼務していた、岩下が失脚したため、反岩下の経営陣が、岩下の一の子分の一三を追い出しにかかるのは必定だった。彼らは北浜銀行が保有する箕面電鉄株式の買い取りを求めた。一三にはカネがないこと、同社の資金練りが苦しいことも百も承知の上での作戦である。もし北浜銀行が保有している株式を引き取らないなら、専務の一三の辞任を要求するハラだった。一三は事業人生の瀬戸際に立たされた。だが、彼はこの危機をチャンスに変えた。日本生命、大同生命などを駆けずり回って、同電鉄株式をはめ込む一方、各方面から借金して自分も株を買った。一三は、こう語っている。「北浜銀行の破綻事件が起きて、とうとう僕が箕面電鉄を背負い込む形になってしまった。いやがおうでも、今までのような僕ではいかず、一生懸命こいつをなんとかモノになければならぬ運命に立ち至ってしまった。それまでの箕面電鉄は北浜銀行というバックがあり、岩下という看板があって、僕としても他力本願、有体な呑気な仕事であったが、北浜銀行のとぼっちは僕の電車にまともにやって来て箕面の信用が世間に問われることになった。僕たるもの、ここ一奮発も、二奮発もせざるを得ないことになったわけである。いわゆる雑魚のトト交じりで、小さな電鉄ながら一生懸命、ゴマメの歯ぎしりで苦心経営の衝にあたった」後年、一三は「北浜銀行事件が起こらなかったら、私は世間にある普通の重役と同じように、大株主の顔色とその御意見に従わねばならぬ場合があったかもしれない」と言っている。一三の仕事は今度は、鉄道の経営だ。難局を打開したのは一三の時代を見る目であった。一三の先見性は甲州商人の DNA の発露とっていいだろう。大阪特有の金銭哲学と風土が超合理的な事業感覚とアイデアマンとしての行動力を兼ね備えた新しい甲州商人を育てたのである。日清・日露戦争により、大阪周辺には会社や工場が林立した。勤め人のための住宅が郊外に広がりつつある時代で、一三は沿線を実際に歩いてみて、この事業の成功を確信した。「乗る人がいなくて赤字になるなら、乗る客をつくりだせばよい。それには沿線の人の集まる場所をつくればいいのだ」。都心から郊外に向けて電車を走らせ、沿線に住宅を、都心にデパートや映画館、ホテルを、途中で遊園地や野球場をつくって新しい乗客を生み出した。一三が独自につくりあげた私鉄経営のビジネスモデルは全国津々浦々の私鉄の経営者に模倣された。レジャーや文化、あるいはエンタテインメントの情報がビジネスの表舞台に登場するようになったが、こうした大衆文化の生みの親が彼だった。

小林一三が、岩下氏に言われ続けた言葉とはなんですか？

()